

令和3年度 S特選コース

第1回 入学試験問題 (2月1日 午後)

国語 (50分)

注意

- 1 この問題用紙は、試験開始の合図で開くこと。
- 2 問題用紙および解答用紙に受験番号・氏名を記入すること。
- 3 答えはすべて解答用紙に記入すること。
- 4 字数制限のある場合は、特別な指示がない限り、すべて句読点や「」「」などの記号を含んだ字数として解答すること。
- 5 印刷がわからない場合は申し出ること。
- 6 試験終了の合図でやめること。

東京都立大学等々力中学校

受験番号		氏名	
------	--	----	--

□ 次の——線の漢字はひらがなに、カタカナは漢字に直して答えなさい。

- 1、言質をとる。
- 2、健気な姿に感動する。
- 3、遅刻はご法度だ。
- 4、風情のある庭園を歩く。
- 5、手間を省く。
- 6、髪をユウ。
- 7、苦勞するのはジゴウ自得だ。
- 8、師の教えをトいて諸国を回る。
- 9、彼女の作品はテイヒヨウがある。
- 10、友人の意見にキョウメイする。

□ 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

風船配りのアルバイトをするようになった「わたし」は、支給されたピンク色のウサギの着ぐるみを着ると周りの人がぬいぐるみや玩具に見えぬようになってしまう。

その日一日、風船配りをしているあいだ、わたしはさまざまな着ぐるみを見た。名前もわからないようなキャラクターも見た。やって来るお客さんたちは皆、何かを着ていた。店長さんの場合と同じで、それは着ぐるみみたいな形をしているとは限らない。若い女の人が、忍者の格好をしていることもある。赤影(注1)とかかしら。バービー人形やリカちゃん(注2)が歩いているので、びっくりしてウサギの頭を脱いでみると、小母おはさんだったりしてまた驚き！ 腰の曲がったおじいさんが、野暮やぼつたいユニフォームを着た野球選手の格好をしているのだけれど、妙に□Aとして奥行きが薄い。あれはいったい何だろうとよくよく見て、そうか、メンコ(注2)だと気づいて嬉しくなった。メンコは年配の男の人に多くて、横綱メンコもけっ

こう見かけた。

小さな子供たちは、わたしが知らないキャラクターになっていることが多い。子供番組、観ないからなあ。でもウルトラマンはやっぱ人気者だ。何かいたずらをしたらしく、お母さんに叱られてお尻をぶたれている男の子が、<sup>①</sup>スパイダーマンだったのには笑ってしまった。映画を観たんだね。正義の味方は、お母さんの言うことをきかなくちゃダメだよ。

着ぐるみ——ぬいぐるみでは、いちばん人気はパンダのようだった。大人のお客さんたちのぬいぐるみは、ほとんどみんなが、どこかしら傷んで汚れていた。手がとれていたり、耳が切れていたりするものも多い。

思い出だけ残して、忘れ去られた玩具たち。捨てられてしまったものもあるだろう。ちよつと見て、何だかわからないくらい汚くなっているものは、きつとそういう玩具だ。

田中さんの言うとおり、着ぐるみを着て動き回るのはけっこうな重労働なので、休憩時間はひんぱんにもらえた。わたしは事務の人に頼み、接着剤をもらった。<sup>(注)</sup>わたしのチョ子のほつれているところを修理したかったのだ。本当は縫い合わせてあげたかったのだけれど、着ぐるみを着たままでは、細かい針仕事はできない。

「その着ぐるみ、どこも破れてないけど？」

接着剤をくれた事務の人は、不思議そうな顔をしていた。わたしは笑ってごまかして、更衣室でチョ子に応急処置をしてやった。

午後三時ごろになると、だいぶ疲れてきた。一方で、ぬいぐるみと玩具の大作進にはすっかり慣れてしまった。もうどんなものがそこら歩いていても平気だ。コンニチハと言って風船を差し出すだけだ。

と思っていたら——

一人だけ、普通の子供を見かけた。そちらの方が自然なのに、わたしはとても驚いた。

中学一年生ぐらいだろうか。顎のちよつとしゃくれた、きかん気そうな少年だった。Tシャツにジーンズ、ブランドもののスニーカーを履いている。

日曜日なのだし、このお店では文房具なども扱っているの、中学生が一人で来てもおかしくはない。少年がお客さんたちの流れに混じって店内に消えてゆくのを、わたしは目で追って見送った。

あの子には、小さいとき大切にした玩具がなかったのかしら。今も、何もないのかしら。

まあ、そういうこともあるのだろう。わたしはまた風船配りに励んだ。

一時間ほどして、休憩をとろうと更衣室に戻りかけたら、奥の事務室がなんとなくあわただしい。通りかかった店員さんに、着ぐるみの頭を脱いで、どうしたんですかと尋ねた。

「万引きを捕まえたの」

店員さんは顔をしかめた。

「中学生なんだけどね。常習犯なのよ」

とっさにわたしは、さっきの、<sup>②</sup>着ぐるみにも玩具にも見えなかった少年のことを思った。

「警察に報せるんですか」

「どうかね。まず親を呼ぶのが先ね」

しばらく後、冷たい物を飲み、汗をぬぐって着ぐるみを着なおし、わたしが店の前に行くと、タクシーが一台路肩に寄って、女の人を一人おろした。この人も、着ぐるみにも玩具にも見えなかった。タクシーの運転手さんはマグマ大使に見えるのに、女の人はどこまでも普通の人間にしか見えなかった。

顎の形が、あの少年に似ている。

きつとお母さんだ。

お店の奥へと消えてゆく。不機嫌そうな表情は、バーゲンに沸き立つ日曜日のスーパーには、ひどく不似合いなものだった。

夕暮れが近づき、ますますお客さんは多くなり、風船はなくなっても、チラシをまいたり、子供たちと握手したりして、忙しかった。が六時であがる約束だ。そろそろだな——と思っていると、あの女の人と少年が出てきた。

やっぱり母子だったんだ。並んでいると、本当によく似てるのがわかる。

二人して、何かに押しつぶされたみたいで、歪んだ顔をしている。顎の噛み合わせが悪くなっちゃうよ。

二人はわたしのすぐ脇を通った。しゃにむに **B** 歩いているので、ぶつかりそうになってわたしは避けた。

そして気がついた。二人の背中に、何かくっついていて。

埃のかたまりみたいなものだ。いや、煤だろうか。黒くてふわふわしていて、何か気持ちの悪いものだ。

はっとして、わたしは着ぐるみの頭を脱いだ。急ぎ足で遠ざかる二人の後を、何歩か追いかけて近づいた。

少年のTシャツの背中にも、お母さんのブラウスの背中にも、何もくっついていない。

わたしはウサギの頭をかぶった。すると、また二人の背中に黒いものが見えた。今度ははつきりと、手の形に見えた。<sup>③</sup>鉤爪の生えた痩せた手。

その指先が、少年とお母さんの肩を、後ろからつかんでいる。しかも、**C** 動いている。背中を這う蜘蛛みたいだ。

ぞつとして、わたしは震えた。

あれは何だろう？ 何かとても、とても、悪いものだという気がする。

着ぐるみや玩具を着ている人たちには、あんな黒い手は張りついていなかった。誰も、あんな気持ち悪いものに憑かれてはいなかったのに。

更衣室で着ぐるみを脱ぐと、壁に立てかけた。ピンク色のよれよれしたウサギは、きよとんとした顔でわたしを見ている。

「ねえ、あれ何？ わたしに何を見せてくれたの？」

もちろん、着ぐるみは何も答えてくれない。

わたしは考えた。あの母子の背中にくっついていて、不気味な黒いもの。世の中に漂う、悪いもの。わたしたちは誰だって、それに憑かれる危険があるのだ。そして悪いことをしてしまう。万引きだって、そのひとつだ。

でも、ほとんどの人がそんな羽目にならないのは、身にまとっている着ぐるみや玩具たちに、守られているからじゃないのかな。

何かを大切にしたい思出。

何かを大好きになった思出。

人は、それに守られて生きるのだ。それがなければ、悲しいくらい簡単に、悪いものにくっつかれてしまうのだ。

このピンクのウサギの着ぐるみは、わたしにそれを見せて、教えてくれたのだ。

「あなた、凄いな」わたしは着ぐるみに話しかけた。

五年間、倉庫に置きっぱなしにされているあいだに、中身が空っぽのウサギさんのなかに、何かが宿ったのだ。悪いものではなくて、そう、清らかなものだ。それはずっと息づいていて、この着ぐるみに不思議な力を与えた。

③これ、欲しいな……と思った。

店長さんに交渉して、売ってもらおうか。だって、これから先、都会で知らない人たちに混じって暮らしていくわたしにとっては、これ以上心強い武器はないじゃないか。かぶってみるだけで、悪い人を見分けることができるんだもの。

そのとき、壁にもたれていた着ぐるみの頭が、ゆらりと傾いた。触ったわけではない。動かしたわけではない。

——やめておきなよ。

わたしに向かって、着ぐるみがかぶりを振ったのだ。

急に怖くなって、わたしは着ぐるみから一步離れた。着ぐるみのウサギは、今度は反対側にふらりと首を振って、元の位置に戻った。今度も、触ったわけじゃないのに。

X「そうだね。やめとくよ」

声に出して、わたしは言った。

「わたしにはチヨ子がいるもんね」  
ピンク色のウサギの顔が、かすかに笑ったように見えた。

その晩、母に電話をかけた。チヨ子、チヨ子と騒ぐわたしに、母は面食らったみたいだ。  
「チヨ子なら物置に入れてあるよ」  
「持ってきて！」

ああ、よかった。お母さんはチヨ子をとっておいてくれたんだ。よかった。ごめんねチヨ子、物置なんかに入れておけばなしにして。ごめんね、すっかり忘れていて。

「もしもし？ 持ってきたよ。どうしようっていうの、これを」  
「チヨ子、無事？」

「無事も何も……汚れてるけどね」  
「手のところがほつれてない？」

母はちよつと黙ってから、答えた。「Iよ。これ、あんたがやったの？ 不器用だねえ。はみ出してるよ。だけど、いつこんなことしたの？」  
「IIよ」

わたしは嬉しくなって、狭いアパートの壁に向かって笑った。

「お母さん、あたし今度の週末に帰るから、チヨ子、陽のあたるところに出しておいてやってね。絶対そうしてね」

「あんた、何言ってるの？ 大丈夫かい？」

大丈夫だよ。わたしは笑いながら答えた。

「チヨ子のこと思い出したから、迎えに行くんだ！」

不思議な出来事に、<sup>④</sup>わたしは高い日給よりも良いものをもらった。

あのピンクのウサギの着ぐるみは、また倉庫にしまわれたことだろう。次はいつ出番がくることやら。でも皆さん、もしも下町のスーパーで、着ぐるみを着る仕事をするようになったら、この話を思い出してみてください。

あなたの鏡のなかには、何が映るでしょうか。

(宮部 みゆき「チヨ子」より)

(注1) 「赤影」……………「仮面の忍者 赤影」という忍者漫画およびテレビアニメ作品の名前。

(注2) 「メンコ」……………昭和時代に子供たちの間で流行した遊び。

(注3) 「わたしのチヨ子」……………「チヨ子」は子供の頃に「わたし」が好きだったウサギのぬいぐるみの名前。更衣室の鏡に映った自分の着ぐるみ姿が「チヨ子」にそっくりであり、「わたし」は着ぐるみとチヨ子を同一視している。

(注4) 「マグマ大使」……………手塚治虫による同名の漫画作品の主人公の名前。

(注5) 「鉤爪」……………根元から先にかけて下向きに曲がった爪のこと。

問一、

A
---

と

C
---

にあてはまる言葉として最も適当なものを次から選び、それぞれ記号で答えなさい。

- ア、ずんずん      イ、ばんばん      ウ、こそこそ      エ、もぞもぞ      オ、パラパラ      カ、ペラペラ

問二、——線①「スパイダーマンだったのには笑ってしまった」とありますが、それはなぜですか。その理由として最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

- ア、ヒーローに憧れるならば周りに尊敬されるようふるまいをするべきだと思ったから。  
イ、観たばかりであるう映画のヒーローになりきる様子が子供らしくてほほえましかったから。  
ウ、正義の味方の格好でたくさんの人たちの前で母親に叱られているのが気の毒だったから。  
エ、子供たちが憧れるヒーローなのに母親にお尻をぶたれているという食い違いがおかしかったから。

問三、——線②「着ぐるみにも玩具にも見えなかった少年」とありますが、その理由を「わたし」はどのように考えていますか。それを説明した次の文の空欄にあてはまる言葉を文章中から指定された字数で探し、それぞれ抜き出して答えなさい。

この少年には 

1、十一字
-------

も 

2、十三字
-------

もないから。

問 四、——線③「これ、欲しいな……と思った」とありますが、それはなぜですか。その理由を説明した次の文の空欄にあてはまる言葉をそれぞれ指定された字数で答えなさい。ただし、1は文章中から抜き出し、2は文章中の言葉を使って答えること。

ピンク色のウサギの着ぐるみには 1、六字 が宿っており、 2、二十五字以内 ので、都会で一人で暮らしていく自分には是非とも必要だと思ったから。

問 五、

I

・

II

にあてはまる言葉の組み合わせとして最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

- ア、I—ほつれたところを、縫い合わせてある  
          II—縫った糸、目立ちすぎているわ
- イ、I—ほつれたところを、接着剤でくっつけてある  
          II—接着剤、もう取れかかっているわ
- ウ、I—ほつれたところを、接着剤でくっつけてある  
          II—接着剤、まだ新しいみたいだ
- エ、I—ほつれたところを、接着剤と糸でくっつけてある  
          II—接着剤は、まだ新しいみたいだ

問 六、——線④「わたしは高い日給よりも良いものをもらった」とありますが、「高い日給よりも良いもの」とはどのようなものですか。適当でないものを次から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア、思い出はお金では決して買えないという気づき。
- イ、かつて大切にしていたチヨ子を思い出すきっかけ。
- ウ、物にまつわる思い出に守られて人は生きているという気づき。
- エ、チヨ子と自分自身との関わり方を考え直すきっかけ。



問七、――線X「そうだね。やめとくよ」とありますが、ここでの「わたし」の気持ちや文章全体の内容を考えた生徒たちの意見について最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア、Aさん―「わたし」が「やめとくよ」と言ったのは、「わたし」の気持ちが「自分にはチヨ子がいるから充分幸せだ」って気持ちに変わったからだと思う。それと、お互いに信頼し合って良い関係を築いている「わたし」と母、そうは見えない少年と母親、そういう家族関係も対照的に描かれているのが印象的だったな。

イ、B君―そうかな、僕は別の気持ちが進められていると思うんだけど。どうして「やめとく」かっていうと、「自分のことはチヨ子が守ってくれるから大丈夫だ」、だから着ぐるみのウサギに「あなたがいなくなったら悪い人には負けない」って「わたし」が強がったのを見たから、ウサギも笑ったんじゃないのかな。

ウ、C君―僕はAさんの意見に近くて「やめとくよ」には「わたし」の気持ちの変化が含まれているとは思うけど、中学生の少年と対照的に描かれているのは家族関係じゃないと思うな。チヨ子に愛情を注いできた「わたし」、それに対して少年は何にも愛情を注いでいなかったことだと思っつな。

エ、Dさん―みんなの意見をきいて納得するところもあるけど、ちょっと深読みし過ぎている気がする。ここでの「やめとくよ」は、本当なら動かないはずのウサギの着ぐるみが急に動いて、怖くなった「わたし」がここではひとまず着ぐるみの言うとおりにしておうと思っただけじゃないのかな。

問八、文章の内容や表現の説明として適当でないものを次から一つ選び、記号で答えなさい。

ア、スーパーに到着した母親が不機嫌な様子なのは、自分の息子が度々万引きをして呼び出されるためにうんざりしているからである。

イ、スーパーの客たちの着ぐるみはどれも小さいものであり、これは楽しい思い出はいつまでも色あせることがないということを示している。

ウ、「わたし」は妻家を出て暮らしているが、チヨ子のことを思い出すまではチヨ子が今物置にしまわれていることも知らなかった。

エ、この文章は「わたし」が見たり思ったりしたことを中心に語られているが、最後は読んでいる人たちに「わたし」が呼びかける形で結ばれている。

Ⅲ 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。なお、設問の都合上、表記を変更した箇所があります。

何を今ごろといわれそうだが、いわゆる若者言葉で、ヤバイという言葉の意味を聞いたときは正直驚いた。私たちが使ってきたニュアンスとはまったく逆。「あの試験どうもヤバイなあ」と言えば、落っこちそうだとしたことだったはず。いつの間にか「このコーヒー、めっちゃヤバイ」が、すごく旨いうまいというニュアンスになっていた。

言葉が時代とともに変わっていくのはやむをえないことであり、とどめようもないところがある。いまとなつては「ら抜き言葉」の是非を云々うんぬんすること自体、どこか間が抜けていると感じるほどに、わずか20年ほどのあいだに「ら抜き言葉」が一般化してしまった。

私自身はいまもはかない抵抗を続けていて、どうしても「見れる」とか「食べれる」などの「ら抜き言葉」は使えないし、使うつもりもないが、<sup>①</sup>若者たちの「ヤバイ」にはそれとは違った違和感（注）と危惧（注）を抱いている。「ヤバイ」が「旨い」「おもしろい」「かっこいい」「素敵だ」「気持ちいい」など、ほんらいかなりニュアンスの違った感覚、感情をすべてひっくるめて一語で代弁してしまうところにもまず引かかる。

ある感動を表現するとき、たとえば「good!」一語で済ませてしまうのではなく、そこにニュアンスの異なったさまざまな表現があること自体が、文化なのである。「旨い」にしても、「おいしい」「まろやかだ」「コクがある」「とろけるようだ」などなど、どのように「旨い」かを表わすために、私たちの先人はさまざまに表現を工夫してきた。それが文化であり、民族の豊かさである。

いつも、もってまわった高級な表現を使えというのではまったくないが、必要に応じて、自分自身が持ったはずの〈感じ〉を自分自身の言葉で表現する、そんな機会は、人生において必ず訪れるはずである。<sup>②</sup>そんなときのために、私たちは普段は使わなくともさまざまな語彙（注）を用意しているのである。語彙は自然に増えるものではなく、読書をはじめとするさまざまな経験のなかで、<sup>（注）</sup>培つちかわれていくものである。すでに大野晋（注）氏の言葉を紹介したように、

A
---

が、生活の豊かさでもあるはずなのだ。

すべてが「ヤバイ」という符牒（注）で済んでしまう世界は、便利で効率がいいかもしれないが、その便利さに慣れていってしまうことは、実はきわめて薄い文化的土壌（注）のうえに種々の種を蒔くことに等しいのであるかもしれない。

「ヤバイ」は多くの形容詞の凝縮（注）体であると考えることができる。「ヤバイ」一語で済ませるのではなく、それを自分の側からもっと細かいニュアンスを含めた表現によって深めたいという話をしてきた。

しかし、先にあげたさまざまな状態や感情を表わす言葉は、それでも一般的な、最大公約数的な意味を担った形容詞なのである。必ずしも、その人独自の表現というわけではなく、誰にも通用する表現法であることから、「ヤバイ」とそんなに違ったものではないという反論も可能である。

話が飛躍するようだが、近代の歌人に島木赤彦がいる。彼はアララギ派の歌人であり、アララギは「写生」をその作歌理念に掲げていた。なぜ

写生が必要なのか。赤彦は『歌道小見』という入門書の中で、「悲しいと言えは甲(注4)にも通じ乙(注5)にも通じます。しかし、決して甲の特殊な悲しきをも、乙の特殊な悲しきをも現しません。歌に写生の必要なのは、ここから生じて来ます」と述べる。

短歌は、自分がどのように感じたのかを表現する詩形式である。歌を作りはじめたばかりの人の歌には、悲しい、嬉しいうれと形容詞で、自分の気持ちを表わそうとするものが圧倒的に多い。作者は「悲しい」と言うことで、自分の感情を表現できたように思うのであるが、これでは作者が「どのように」悲しい、うれしいと思つたのかが一向いっこうに伝わつてこない。赤彦の言う作者の「<sup>③</sup>特殊な」悲しきが伝わることはない。形容詞も一種の出来合いの符牒なのである。

斎藤茂吉は島木赤彦と同時期に「アララギ」を率いた近代短歌の巨匠であるが、彼に、母の死を詠んだ一連がある。歌集『赤光』中の「死にたまふ母」一連である。

死に近き母に添寝そいねのしんしんと遠田とわたのかわず天てんに聞ゆる

のど赤き玄鳥つばくらめふたつ屋梁はりにいて足乳根たらちねの母は死にたもうなり

誰もが知つている歌であろう。一首目は「死に近き母」をはる(注6)る陸奥の実家に見舞い、添い寝をしている場面である。普段は気にもならない蛙の声が天にも届くかと思われるほどに聞こえてくる。決して騒がしい声ではなく、しんしんと天にも地にも沁しみみいるような声である。一首が言つているのはそれだけのこと、まことに単純な事実だけを詠うたつている。二首目も、母がもう死のうとしている枕元、ふと見上げると喉のどの赤い燕つばめが二羽(注7)、梁はりに留とどまっていた。ただそれだけである。

ここには「悲しい」とか「寂しい」とか、そのような茂吉の心情を表わす言葉は何一つ使われていないことに注意して欲しい。にもかかわらず、私たちはそのような形容詞で表わされる以上の、茂吉の深い内面の悲しきを感じることができているのである。考えてみれば不思議な精神作用である。文章の上では何も言われていない作者の感情を、読者はほとんど何の無理もなく感受することができているのである。

もしこれらの歌のなかに、茂吉の感情として「悲しい」「寂しい」などの形容詞が入つていたらとするならば、一般的な感情としては理解できるが、それだけではけつしてその時の茂吉の悲しき、寂しさを表現したものにはならないだろう。悲しい、寂しいという最大公約的な感情の表現でしかないからである。「決して甲の特殊な悲しきをも、乙の特殊な悲しきをも現しません」と赤彦の言う通りである。

短歌では、作者のもつとも言いたいことは敢あえて言わないで、その言いたいことをこそ読者に感じ取つてもらふ。単純化して言えば、<sup>④</sup>短詩型文学の本質がここにあると私は思つている。

これはかなり高度な感情の伝達に関する例であるが、私たちは自分の思い、感じたこと、思想などを表現するのに、できるだけ「出来あいの言葉」を使わずに、<sup>⑤</sup>自分の言葉によって、自分の思いを、人に伝える。この大切さをもう一度確認しておきたいものだと思う。

(永田 和宏「知の体力」より)

(注1) 「危惧」……悪い結果にはしないかと気にかかって落ち着かないこと。

(注2) 「大野晋」……日本の国語学者で、文学博士。

(注3) 「符牒」……仲間内でのみ通用する言葉。

(注4) 「甲」……ここでは「Aさん」という意味。

(注5) 「乙」……ここでは「Bさん」という意味。

(注6) 「陸奥」……東北地方のこと。

(注7) 「梁」……柱の上に横たえて、屋根の重さを受ける材木。

問一、——線①「若者たちの『ヤバイ』とありますが、筆者は若者言葉の「ヤバイ」に対してどのような気持ちを持っていますか。最も適当なものから選び、記号で答えなさい。

ア、一つの言葉にあまりにも多くの感覚や感情をもたせることが、文化的な豊かさを失う一つの原因になると心配している。

イ、若者だけが全く逆の意味で言葉を使っていることが、世代間のコミュニケーションを困難にする原因になると心配している。

ウ、先人たちのさまざまな表現の工夫を知ろうとしないことが、今後の文化的発展を遅らせる可能性があるとして不安を感じている。

エ、読書やさまざまな経験が表現の工夫をするきっかけにならず、言葉の減少を予想以上に加速させるとして不安を感じている。

問二、——線②「そんなとき」とは、どのような「とき」ですか。文章中の言葉を使って四十字以内で答えなさい。

問三、

A

には、次にあげた大野晋さんの文章を通して言いたいことが書かれています。次の文章を読んで、  
あてはまる言葉として最も適当なものを後から選び、記号で答えなさい。

A

に

語彙が多いとか少ないとかいうけれど、人間はどのくらいの言葉を使うものなのか。

例えば新聞や雑誌に使われている単語は、年間およそ三万語といわれています。しかし、その五〇〜六〇パーセントは、年間の使用度数1です。つまり、半分の単語は新聞・雑誌で一年に二度とお目にかかることがない。(中略)

生活していく上で間にあうという数でいえば、三〇〇〇語あれば間にあう。だいたいは生きていられる。これが、いわゆる基本語です。では、三〇〇〇語知っていればいいか。言語生活がよく営めるには、三〇〇〇では間にあわない。三万から五万の単語の約半分は、実のところは新聞でも一年に一度しか使われない。一生に一度しかお目にかからないかもしれない。しかし、その一年に一度、一生に一度しか出あわないような単語が、ここというときに適切に使えるかどうか。使えて初めて、よい言語生活が営めるのです。そこが大事です。語彙を七万も一〇万ももっていたって使用度数1、あるいは一生で一度も使われないかもしれない。だからいらんのではなくて、その一回のための単語を蓄<sup>たくわ</sup>えていること。

(大野 晋 「日本語練習帳」より)

- ア、ひよっとしたら必要な言葉の数は正しく把握できないかもしれないけれど、それを気にすることなく多くの言葉を知って使うこと
- イ、ひよっとしたらめったに見ることはないかもしれないけれど、それを気にすることなく多くの言葉を知って使うこと
- ウ、ひよっとしたら一生に一度しか使われないかもしれないけれど、それを覚悟で一つの語彙を自分のなかに溜め込んでおくこと
- エ、ひよっとしたら誰も使われないかもしれないけれど、それを覚悟でできるだけ多くの語彙を自分のなかに溜め込んでおくこと

問四、——線③「特殊な」と反対の意味になる表現を文章中から七字で探し、抜き出して答えなさい。

問 五、——線④「短詩型文学の本質がここにある」とありますが、「短詩型文学の本質」とはどのような点だと筆者はいうのですか。それを説明した次の文の空欄にあてはまる言葉を文章中から指定された字数で探し、それぞれ抜き出して答えなさい。

作者の伝えたいことを

1、六字

2、二字

させるのではなく、言いたいことは敢えて言わずに、作者の

3、四字

4、二字

することができるよう表現する点。

問 六、——線⑤「自分の言葉」と同じ意味になる言葉を文章中から八字で探し、抜き出して答えなさい。

問 七、文章中で筆者が述べていることとして最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア、一つだけで様々な感情や状況を表現できる言葉を持つことが、個人や民族の豊かさに繋がるので、言葉に多くの意味を持たせることも受け入れるべきである。

イ、言葉は時代とともに変わり、時に若者にとっては高級で豊かな表現になっていくこともあるので、言葉に多くの意味を持たせることも受け入れるべきである。

ウ、個性を主張する場合には、他人とは共感しえない内面が際立つように表現する必要があるので、めったに使わないような言葉も知っておくべきである。

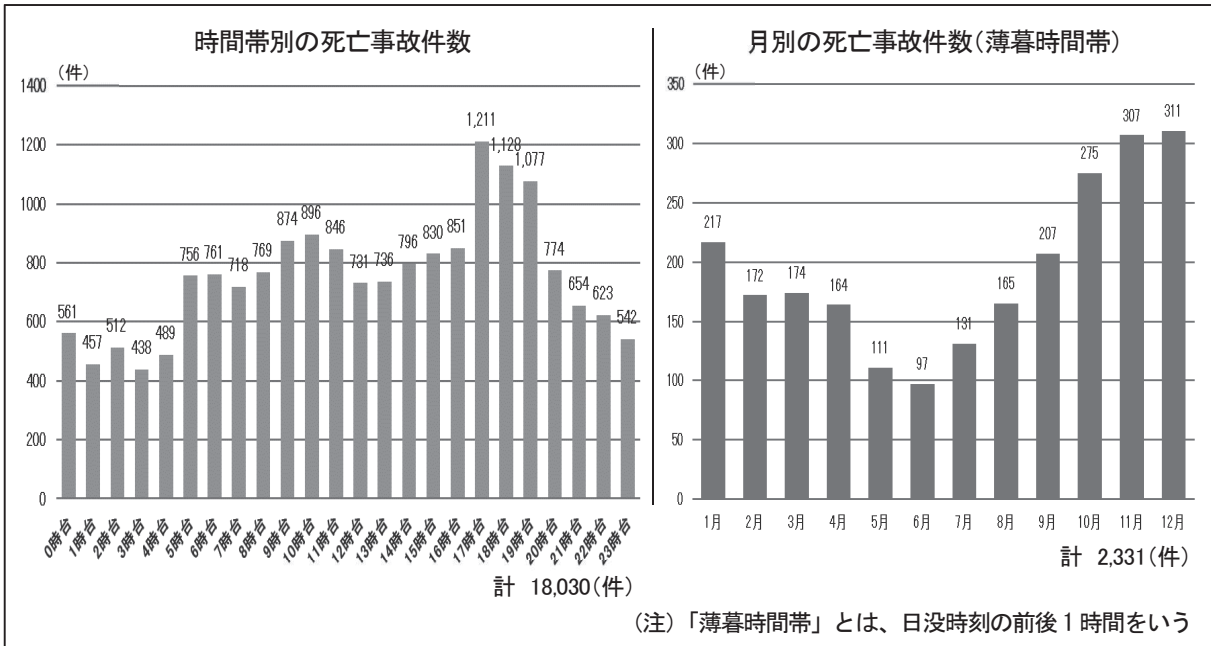
エ、自分の内面を表現するためには、一般的な言葉を使っているだけでは不十分なこともあるので、めったに使わないような言葉も知っておくべきである。

問題は次ページに続きます。

四

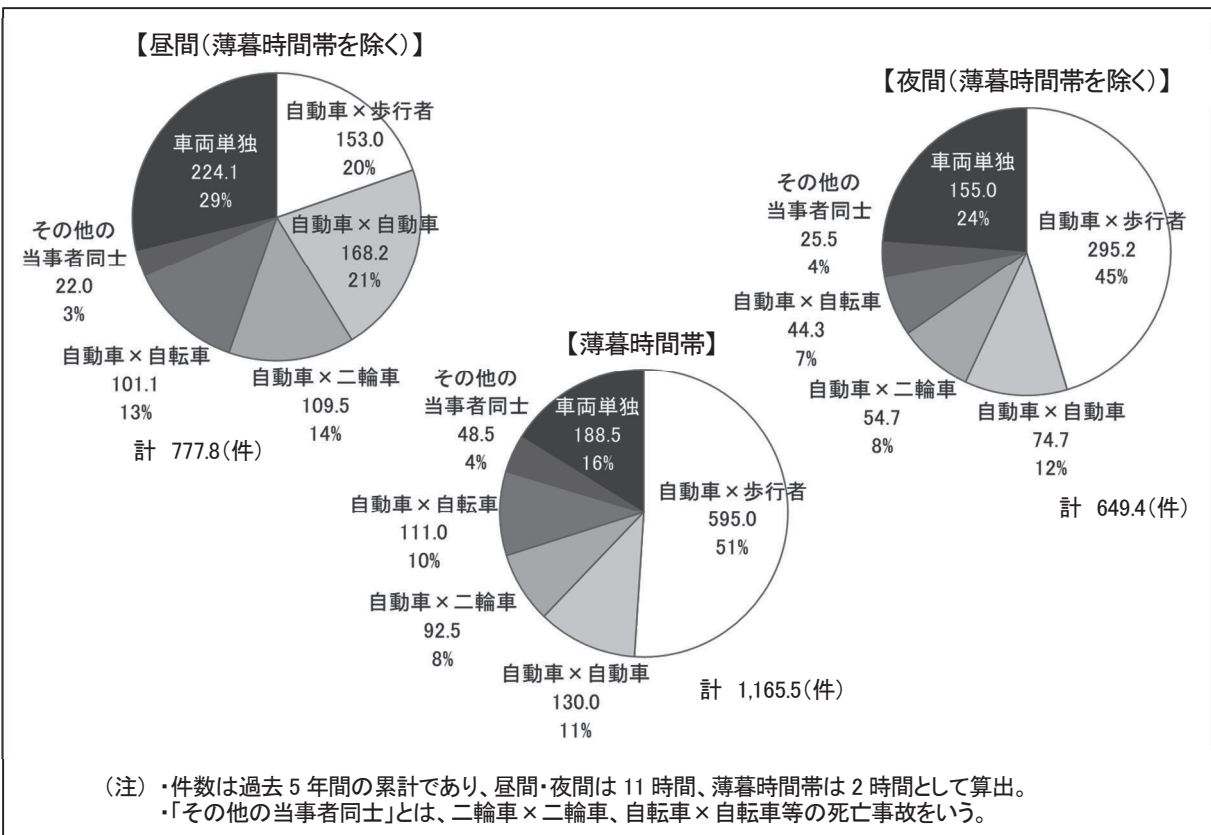
「交通事故」に関する次の資料を見て、あとの問いに答えなさい。

資料A：時間帯別・月別の死亡事故件数（平成27年～令和元年）



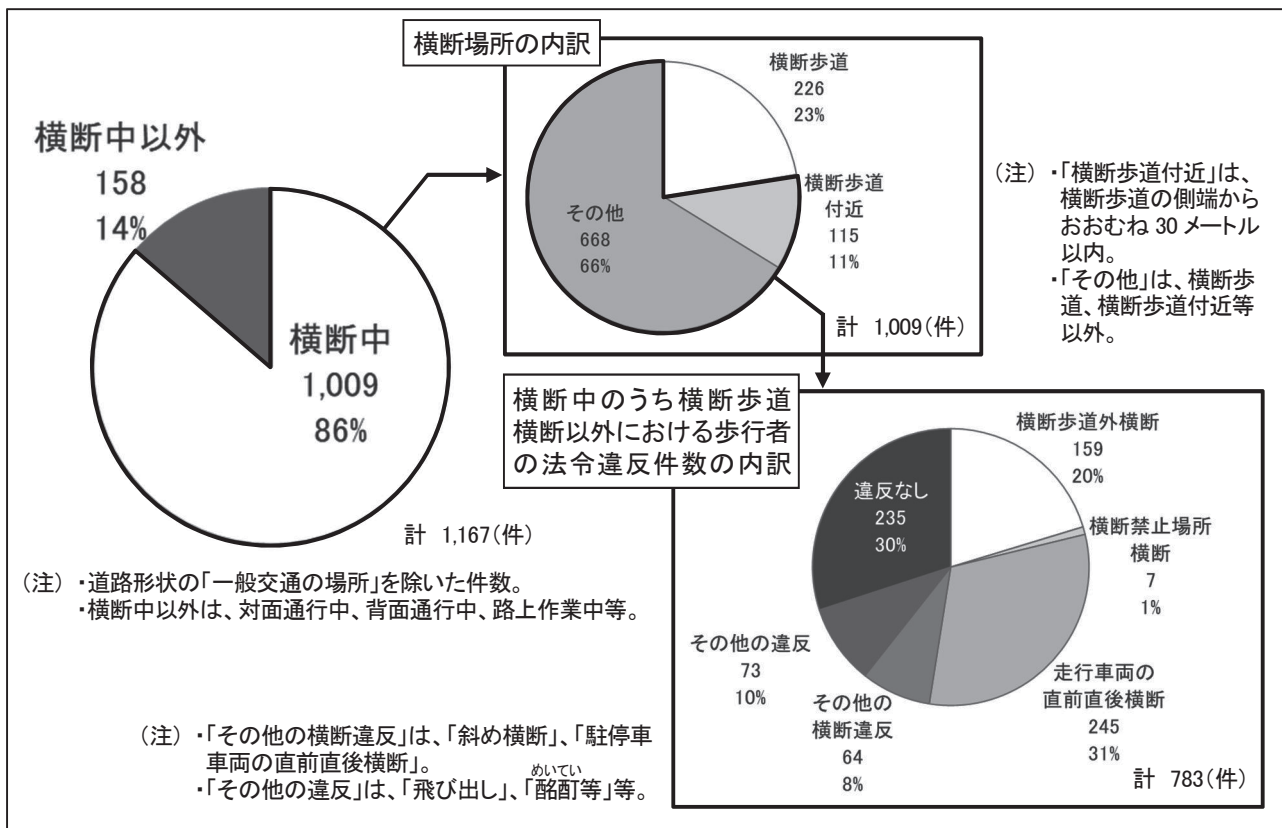
(出典:警察庁Webページより(以下同様))

資料B：死亡事故の時間当たりの当事者別件数（平成27年～令和元年）

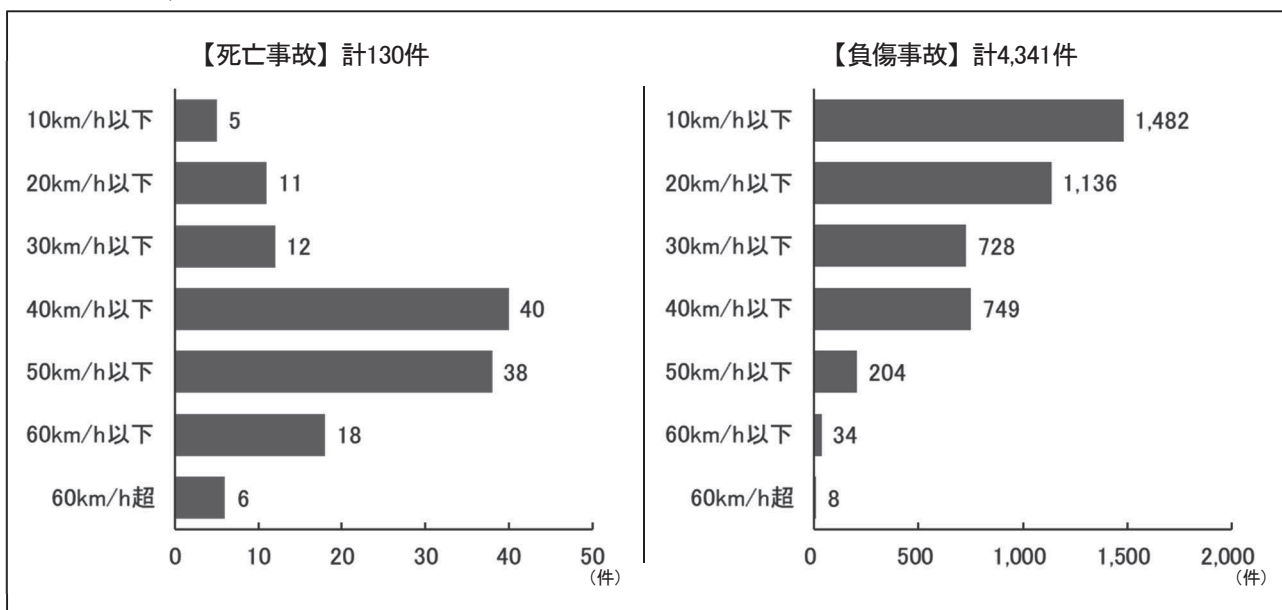




資料C：薄暮時間帯における「自動車対歩行者」の事故類型別死亡事故件数（平成27年～令和元年）



資料D：薄暮時間帯の信号機のない横断歩道における事故件数と自動車の速度（平成27年～令和元年）



問 一、資料A～Cから読み取れることとして適当でないものを次からすべて選び、記号で答えなさい。

- ア、一日のうちで交通事故による死亡件数が多いのは、薄暮時間帯から夜中にかけてである。
- イ、薄暮時間帯の死亡事故は7月以降増加傾向に転じ、特に11月～12月にかけて最も多く発生している。
- ウ、薄暮時間帯に発生する死亡事故は、自動車と歩行者の事故が多く、約9割が横断中に発生している。
- エ、昼間に発生する死亡事故は車両の単独事故が最も多く、次に自動車と歩行者の事故が多くなっている。
- オ、自動車と歩行者の死亡事故は、昼間に比べて夕暮れ時が約4倍、夜間が約2倍多く発生している。
- カ、薄暮時間帯において、歩行者の横断中に発生した死亡事故は、約8割が横断歩道以外で発生している。
- キ、薄暮時間帯において、横断歩道以外を横断中に発生した死亡事故は、7割に歩行者の法令違反があった。

問 二、資料Dや他の資料から読み取れることとして最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

- ア、運転速度の遅い自動車が近づく場合は、死亡事故の発生が少ないので、信号機がなくても歩行者は安全に道路を横断できる。
- イ、自動車の速度が速ければ速いほど事故の発生件数は減る傾向があるので、薄暮時間帯の運転はなるべく速度を上げるべきである。
- ウ、薄暮時間帯は視界が変化して、運転者が歩行者などを発見するのが遅れるため、運転速度が遅くても事故が発生しやすくなる。
- エ、外界が暗くなる薄暮時間帯には、運転者が慎重な運転を心がけるため、自然と運転速度が遅くなって事故が発生しにくくなる。

